

事後評価報告書(国際緊急共同研究・調査支援プログラム(J-RAPID))

1. 研究・調査課題名:「東北地方太平洋沖地震による津波の陸地における挙動と水流による地形変化の研究」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者: 東京大学 空間情報科学研究センター 副センター長 教授 小口 高

2-2. アメリカ側研究代表者: アリゾナ大学 水文・水資源学部 指導教授 Victor R.Baker

3. 総合評価: 研究・調査の目標及び実施環境にてらして、相応な成果が得られている

4. 事後評価結果

(1)研究・調査成果の評価について

現在の地形を詳細に計測することにより、その地域に過去に襲来した巨大津波の波高を推定できる可能性を示したことは、津波堆積物調査や古地震調査とは別な独立した情報を提供できる可能性があり、意義がある。

一方で、本研究で見出した津波により形成された地形の特徴を、他地域における津波ポテンシャル等の評価に実際に応用するためには、条件の異なる様々な地域を調査した上での特徴抽出が必要であると推察する。この点についての考察が不十分であり、目標達成のためには、日本に限らず多くの地域で調査をして知見を積み重ねていく必要があろう。

(2)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

地形学、地質学、地球物理学の研究者から成る日米の研究チームを編成し、それぞれ適切に役割分担をしながら、共同研究を進めてきたことは理解できる。

調査目的の中に書かれている「過去に生じた大規模な津波の実態を社会に広く伝える」といった社会学的なアプローチは試みられていない。

(3)総合評価コメント

レーザースキャナーを用いた精密な地形測量から、岩石海岸の現在の谷地形に、過去の巨大津波の痕跡が残っていること、従って、地形計測からその地域に襲来した巨大津波の波高を推定できる可能性を示したことは評価できる。なお、調査地域の変更は、調査の途中経過に基づく方向転換なので、やむを得ないと思うが、かなり本質的な方針転換であった。